

代田中・2 西 花梨

「ブーーッ。」

試合終了の合図。その瞬間、私たちのチームの負けが確定した。「必勝」と書かれた応援用のうちわを祈るように握りしめていた私の手は、力が抜け、うちわを落としそうになる。頭が真っ白になりながらも応援席へ向かい、挨拶をしに行つた。いつもなら聞こえるはずの「応援、ありがとうございました。」という先輩の言葉が聞こえない。泣きくずれる先輩の姿を見て、「負け」という事実がやつと実感として湧いてきた。こうして先輩たちの夏は終わつた。

「一本、二本…。」

少し広くなつた体育館で、シュートの本数を数える。いつもは收まりきらず、二列で並んでいた体育館。一人一人が大きな声で數えていたシュート練習。大好きであこがれていた先輩たちがバスケットボール部を引退してから、何もかも変わつてしまつたという現実が突きつけられる。「声出してね。」と注意してくれた先輩の声がなかなかは新チームを、私たち二年生が引っ張つていかなくては。思いつつて、私は一年生に「もう少し声出せるといいね。」と言つてみた。それでも声を出してくれる子は少なく、その後は何も言えなかつた。私も一年生の頃は恥ずかしくて、なかなか声を出せずにいたため、気持ちはわかる。でも、やっぱりチームの士気を上げるために声は出してほしい。私が自然に大きな声を出せるようになったのはどうしてだろう。経験上、注意したり、みんなに声掛けをしたりするのは、どちらかというと得意な方だ。だが、私は中学校からバスケットボールを始めたのに対し、一年生のほとんどが小学校からの経験

し、気にしなくていい。」

と言われたけれど、気にせずにはいられない。私つてどうしてこんななんだろう。先輩らしく注意もできなければ、けがまでさせてしまうなんて。私の中の「理想の先輩像」から、どんどん遠ざかっていく。それにも関わらず、新チーム初めての練習試合の日程はどんどん近づいてきていた。

ある日の練習終わり、私たち二年生は新キヤプテンに呼ばれて緊急会議をしていた。張りつめた空氣の中、最初に口を開いたのは、キヤプテンだった。

「みんなも、一年生に声かけしてほしいな。今は、全體がだらけているように見えて、試合を行つたとき、相手にも失礼じゃない。もちろん、私や副キヤプテンが中心となつて声を出すけれど、みんなが平等でいいんだ。私だけだと大変だから、助けてほしい。」私は、その言葉を聞いて申し訳なさで胸がいっぱいになつた。だけど、正直、まだ自信は全く持てなかつた。「みんなが平等」という言葉が本当にうれしくて、力になりたいと思うのに。中途半端な自分に嫌気が刺す。そのとき、副キヤプテンも口を開いた。

者で、悔しいけれど実力の差は明らかだつた。もしかしたら、私みたいな下手な人に注意されるのは嫌かもしれない。どうしよう、自信がない。本当は、一年生が練習中に座つているのも、一対一の練習中に別のことをしているのも、フットワークで止めなくてはいけないところで止まらないのも、全部気になる。でも、自信をもてない私は、また何も言えずに練習が終わつてしまつた。

「でも、それで一年生に嫌われたくないな。」

私は、はつとした。そんなの誰だつてそうだ。大切な後輩に、自ら嫌われたいと思う人なんてこの世にいるわけがない。私は、「自信がない」ということを建前にしていたけれど、本当は、注意をすることで、嫌な先輩、怖い先輩と思われたくなかつただけなのかもしれない。でもそれは、ただの「逃げ」じやないのか。チームにとつて大切な声かけすらおろそかにして、何が先輩だ。後輩とちゃんと向き合おうとしていない。それはつまり、私の中の「嫌われたくない」という大きすぎる感情に戦おうともせず、負けを認めているのと同じだ。そんなのかつこ悪すぎる。そして、私の中で前の疑問の答えが見つかつた気がした。

「私が自然に大きな声を出せるようになつたのはどうしてだろう。」ふと思いついた。先輩は練習前、絶対に「声出すよ。」と言つていた。私のように一回きりではなく毎回だ。その言葉で先輩たちを嫌いになつたことはあつただろうか。いや、そんなことがあるわけがない。むしろその言葉には、何度も力をもつた。先輩たちは、ずっと私たちと向き合つてくれていたから、声出しだつて、プレイだつて、先輩たちに良く見てもらいたくて、がんばつっていたのだ。それに気づいた瞬間、私は自分がひどく恥ずかしく思えた。あんなに、先輩たちにあこがれていると言いながらも、私は気づけなかつた。一生懸命やる姿にあこがれていたのに。明るく言ってくれる「声出してね。」という言葉や姿がかつこよかつたのに。私はそんな姿を一年生に見せられていいだろうか。そんな私の様子を察してなののか、キヤブテンは続けてこう言つた。

「私たちがお手本になろう。先輩たちのように。」

今度は、みんなが力強くうなずいた。

今回の出来事を通し、私はかつこいい先輩の理想像という固定概念にとらわれ過ぎていたことに気づいた。嫌われ役を、自らかうなんて勇気のいることだが、そこで本当に嫌われるかどうかは、その

人のやり方次第なのだ。そう。あこがれの先輩たちのように一生懸命な人にやつぱり私はついていきたいと思う。だから、一生懸命に、まつすぐに、一年生へ思いを伝えてみようと思う。もちろん、完全に先輩たちのようになる必要はない。私は、私らしく、優しくてかっこよくて、大切なところは注意してくれて、頼れる、みんなにとってあこがれの先輩になつてやるのだ。